



①式台付玄関

庇の支持には、継場と同じ様式の持ち送りが付けられている。

②チャノマとダイドコ

チャノマ東面には、やり掛けがあり、舞良戸はベンガラに漆がけ。ダイドコには荒神がまつられていたタナがある。



④ニシノマからザシキ

面皮付きの材が各所にあしらわれ、床柱には筭面が施されて、天井には生漆が塗られている。違棚上の天袋襖には桜花と小鳥が描かれ、「■浦印」とある。



⑤ドマ

ドマは吹き抜けになっている。武家住宅にしては比較的広い。



③ダイドコと小屋組み



旧乗田家住宅は、鍋島支藩鹿島藩領であった鹿島市大村方地区、通称「肥前浜宿」と呼ばれる多良海道の町並みの一角にあり、旧武士、*最所家の住まいであった。建物は佐賀県に特徴的な「クド造り」民家であり、質実で地方有力武士らしい表空間がある一方で、通り裏手の閑静な所にあり、畑地や比較的広いドマを有し、養蚕を行っていたとみら

れる。これは兵農分離が未発達であった鹿島鍋島藩の状況を良く伝え、近世武士の生活をよく理解できるものであり、また鹿島市における在方町かつ宿場町に残る数少ない武家屋敷遺構でもある。建築年代は、江戸時代後期と推定されている。

<旧長崎街道多良海道>

長崎街道の塩田から鹿島と浜宿を通り、多良を経て諫早へいたる。浜宿には、上使屋や若宮神社、武家屋敷もあり、早くから都市的な役割をもっていた。

旧乗田家住宅

江戸時代後期の武家屋敷

*最所家について

鹿島鍋島藩士であり、菅原藩、小川藩、鍋島藩に仕える。代々最所吉兵衛を名乗り、6代吉兵衛(新作)から大村方に居住したといわれる。新作は江戸藩邸勤務、藩校弘文館の訓導などをつとめ、明治期には長崎・佐賀県議員となった。

⑥コドモベヤ



平面図 1階

